

地理A、地理B

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

地 理 A

1 前 文

「地理A」は国際化の進展等、社会の変化に伴って現代社会が抱えている課題を地理的に考察することに重点が置かれている。そのために、作業的、体験的な学習を重視し地理的技能を高めることや、今日的課題を日常生活と関連付けて取り扱い、生徒の興味・関心に配慮した内容や方法を工夫したところに特徴がある。

平成21年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、志願者数、受験者数とも昨年度より増加し、地理歴史科の受験者数は360,222人（追・再試験受験者を含む。）となった。教科全体としては2,788人増加しているが、昨年度と比べると、「地理A」のみ受験者が減少している。「地理A」の受験者は5,504人で、昨年度に比べ307人の減少となった。

一方、地理歴史科と公民科との2科目受験者数は221,750人で、昨年度に比べて2,871人減少（「地理A」は288人、「地理B」は1,415人の減少）した。そのうち、A科目の受験者は8,474人で、「地理A」の割合は48%を占めており、「日本史A」・「世界史A」より高くなっている。なお、「地理A」の2科目受験者のうち70%が2科目目に「現代社会」を選択している。

本試験の平均点については、「地理A」54.70点・「地理B」64.45点と、昨年度と比較してそれぞれ2.13点・1.91点下がったが、A科目・B科目の中では「地理A」・「地理B」がそれぞれ最も高かった。また、「地理A」と「地理B」の平均点の差は、昨年度の9.53点から9.75点になり、その幅は「世界史A」と「世界史B」の差（18.52点）や、「日本史A」と「日本史B」の差（11.43点）より小さくなっている。A科目において、最高の「地理A」と最低の「世界史A」の平均点の差が10.52点であり、昨年度の7.55点から広がった。地理歴史科、公民科の2科目受験が多い現状の中で、地理歴史科はもとより公民科の科目も含めて、平均点の差により受験者の有利不利が生じないように、さらなる配慮をお願いしたい。

なお、試験問題の具体的な検討に当たっては、例年どおり次の視点から行った。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標、内容等を踏まえているか。
- (2) 教科書や学習状況を踏まえた内容になっているか。
- (3) 基礎的な知識や事項の解説並びに地図や統計資料などを分析、考察して処理する能力を測定し、地理的な見方や考え方を問うことのできる内容になっているか。
- (4) 特定の分野や地域に偏ることなく、総合的な理解力を問う内容になっているか。
- (5) 問題文や選択肢の表現、難易度、形式、配点、正答率等に問題点や偏りがないように配慮されているか。

2 試験問題の内容・範囲等

今年度は平成 11 年告示高等学校学習指導要領による 4 回目の試験であるが、全般的に同要領の目標や内容にそった問題であった。

今年度の問題は、昨年度と同様に複雑な図表の読み取りは少なかったが、一部に「地理 A」の学習範囲で取り上げることが一般的でない事項や地域からの出題も見られる。出題分野については、昨年度と同様に、全般的に地理的な見方や考え方及び地理的な技能を活用させる問題を中心に出题されている。ただ、図表を読み取るだけで地理的知識がなくても簡単に解答できる問題も見られた。

(1) 出題分野

- 第 1 問 地理の基礎的事項
- 第 2 問 境港市周辺の地域調査
- 第 3 問 現代世界における地域の結び付きとその変化
- 第 4 問 中国の自然環境、生活文化及び産業
- 第 5 問 食料にかかわる地球的課題

(2) 内 容

第 1 問 地理の基礎的事項に関する問題。時差、地形、生活・文化、日本の領域、宗教、球面上の距離、気候などが幅広く問われている。問題数は例年と変わらないものの、索引図が正射図法の半球図であるため記号等を盛り込みすぎた感がある。「地理 B」追・再試験のように、大問をさらに A・B などに分けて出題する工夫も考えられる。

問 1 時差についての基本的な問題。地球儀と世界地図との比較を意識した正射図法半球図で問うている工夫は評価できる。

問 2 新期造山帯の分布についての問題。「地理 A」では取り上げられることの少ない山脈が出题されており、難易度が高い設問である。ヒマラヤ山脈など基本的な山脈を出题した方が適切である。

問 3 モンゴルの生活・文化についての基本的な問題。「地理 A」の学習状況を踏まえた標準的な設問であり、容易に解答できる。写真等を使った出題の工夫が望まれる。

問 4 日本の領域についての問題。地図からの判断よりも、日本の位置と領域に関する正確な知識が必要な設問となっている。また、①のモンゴルは前問と地域が重複しており、他地域に変更する等の工夫が必要である。

問 5 世界の主な宗教についての問題。「地理 A」ではフィリピンの宗教分布を学習する機会が少なく、基礎的事項に関する設問として適切ではない。写真又は、キリスト教の特徴がより分かりやすい宗教施設、例えば、ロシア正教教会に変更するなどの工夫が求められる。

問 6 球面上の距離についての問題。「球面上の距離」の理解を問う良問であるが、出題の意図が十分に伝わっていないと思われる。問われている内容が受験者に明確に分かるような問題文等の工夫が欲しい。なお、「地理 A」における学習の順序からすると、問 1 に続いて出題した方がよい。

問 7 気候の分布についての問題。地点を組み合わせることで、単純に知識を問うような問題とは異なる出題の工夫が見られる。気候下での生活に関する学習を重視する「地理 A」の特徴からす

れば、分布だけを問う設問ではなく問3のような出題が適切である。また、地図に示された地点Rの位置を、Aw気候と誤解した受験者がいたのではないかと思われる。

問8 地図に示された三つの大陸の自然や住民などについての問題。②及び④は「地理A」の学習状況からすると基礎的事項とは言えず、難易度が高い設問である。

第2問 境港市周辺の地域調査に関する問題。地域調査に関する問題は、昨年度まで第5問として末尾に置かれていたが、今年度は高等学校学習指導要領等に示された位置に変更されている。問題構成は昨年度と同様、問6までが「地理B」との共通問題である。問7として「地理A」独自の問題が出題されているが、「地理A」の地域調査は「身近な地域の国際化の進展や日本と世界との結び付きの様子をとらえさせる」（高等学校学習指導要領「地理A」）ことがねらいであり、それにそった独自の問題の割合を増やすよう、更に改善を求めたい。

問1 海岸付近の地形についての問題。「地理A」の一般的な学習状況では、海岸地形について詳細に学習する機会はほとんどなく、難易度の高い設問である。図から判断させる問題では、できるかぎり鮮明な地図を使用してほしい。

問2 斜め空中写真から撮影方向を判定する問題。「地理A」の学習状況を踏まえた標準的な設問であり、容易に解答できる。

問3 地形図の読み取りについての問題。「地理A」の学習状況を踏まえた標準的な設問であり、容易に解答できる。選択肢で取り上げられた地点が地図中に明確な形で示され、受験者の負担を軽減する工夫がなされている。

問4 漁業の生産についての二つの図を読み取る問題。二つの図で年次の示し方が異なっていることもあり、④の「傾向」をどうとらえるかによって、受験者の判断が分かれたのではないかと思われる。よりの確に適否が判断できる表現を工夫する必要がある。

問5 漁業の生産と水産加工についての二つの図を読み取る問題。図の単純な読み取りになっている。読み取った事柄をもとに既習の知識と合わせて適否を判断させるなど、出題の仕方に工夫が求められる。

問6 観光施設にかかわる地域調査の手法についての問題。地域調査の手法についての設問は、一般に作成が難しいが、問い方に工夫が見られる良問である。

問7 境港の貿易についての問題。日本と世界との結び付きの様子を問う「地理A」の独自問題である。限られた地域における貿易の特徴が問われており、難易度が高い設問である。日本全体の貿易の特徴等を踏まえて解答できるよう、適切な国や品目を選択してほしい。

第3問 現代世界における地域の結び付きとその変化に関する問題。「地理A」でよく出題される分野であり、図表や文章など出題形式も工夫されている。若干の設問を除き、難易度も「地理A」として適切である。

問1 日本の輸入相手先についての問題。「地理A」の学習状況を踏まえ、よく取り上げられる輸入先の国名選択を求めた標準的な設問であり、容易に解答できる。

問2 日本の農産物輸入についての問題。身近な輸入農産物から海外との結び付きをとらえさせるよう工夫された適切な設問である。

問3 日本の人的交流についての問題。日本に滞在する外国人と外国に滞在する日本人の動向から、海外との結び付きをとらえさせるよう工夫された適切な設問である。

- 問4 日本と西ヨーロッパ間の交通の発達についての問題。経路の示し方が工夫されている反面、その説明や問われていることへの理解に時間を要する。年代と所要時間を表にまとめる工夫などにより、問題文をより分かりやすくしてほしい。
- 問5 交通機関や輸送手段の近年の変化についての問題。④の「新幹線」が明確に定義されていないため、適否の判断に迷う受験者がいるのではないかとと思われる。
- 問6 通信の発達と産業や生活とのかかわりについての問題。「現代社会」で学習する内容でも判断が可能であって、「地理A」の学習を踏まえた設問となるよう選択肢の文に工夫が必要である。また、④は人口密度の低い国の一般的な事項ととらえて、適否の判断に迷う受験者がいたのではないかとと思われる。
- 問7 中欧・東欧における国家の形態や国家間の結合の変化についての問題。中欧・東欧の国家形態や国家間の結合について踏み込んだ学習が求められており、「地理A」での一般的な学習状況からすれば、難易度が高い設問である。
- 第4問 中国の自然環境、生活文化及び産業に関する問題。自然環境、生活・文化、都市景観、産業、日本との交流など幅広く出題されている。基本的な問題が多いが、「地理A」では近隣諸国は「二つ又は三つの国を選ぶ」ことになっており、学習していない受験者には難しい大問となった。こうした大問が全体のなかで配点が最も高いことも今後検討していただきたい。
- 問1 中国の地形の特徴についての問題。中国を学習していない受験者には難しいので、世界の大地形から判断できるような設問が望ましい。
- 問2 地図に示された4都市の気候についての問題。降水量が最も少ない都市Aを問う設問であるので、基本的な学習で解答できるが、「地理A」では生活・文化との関係から自然環境を問う設問が望ましい。
- 問3 地図に示された3都市の景観についての問題。写真は見やすいが、キ・クは景観が似ており、両方とも説明文に「金融・貿易センター」とあることから受験者には判断しづらかったのではないかとと思われる。ホンコンの景観写真は教科書ではほとんど見られない。
- 問4 地図に示された地域の少数民族についての問題。基本的かつ時事的な問題である。写真や資料があればより「地理A」らしい問題になった。
- 問5 中国四大料理についての問題。「地理A」らしい題材と言えるが、詳細な知識を問う設問となった。既成の分類についての知識を問うより、例えば、遊牧民の料理と他の地域の料理を比較するような、自然環境や農業との関係から判断できる選択肢の方が望ましい。
- 問6 中国における農産物の生産量の推移についての問題。肉類と野菜の違いは難しく、もう一つ判断の手掛かりとなる輸出入のグラフなどがあれば、適切な設問となった。
- 問7 地図に示された四つの工業都市についての問題。個別の工業都市の知識は、「地理A」の学習状況からすると難易度が高い設問である。
- 問8 日本との交流についての問題。教科書でもよく扱う「地理A」らしい題材と言えるが、単なる知識を問う設問となっている。文章ではなく、写真や図表などから選択させる問いの方がよかった。
- 第5問 食料にかかわる地球的課題に関する問題。飢餓と飽食、貿易構造、農業技術や国際協力、食の安全性など幅広いテーマが出題されている。食料問題は教科書によりその扱いに差があることや、

「地理A」の学習範囲を超えるような設問があったことから、難易度にばらつきが見られた。

問1 アジア・アフリカの飢餓についての問題。「年齢のわりに低体重である子どもの割合」という指標は新鮮であるが、受験者には分かりづらかったのではないか。教科書によく見られる「栄養不足人口の割合」の地図とはいくつかの国で相違があり、設問の凡例AとBを判別するのは難しい。アジア・アフリカだけの地図で示されたことにより格段に難易度が高くなった。世界全体を示す方が受験者の判断を助けたのではないかと思われる。

問2 世界の人々の食物摂取の状況についての問題。図の読み取りで容易に解答できる。

問3 貿易に占める食料品の割合についての問題。「地理A」の学習状況からすると難易度の高い設問である。出題する国・地域としては、学習で取り上げられることが多い国（例えばアルジェリアよりサウジアラビア）の方が望ましい。

問4 地図に示された地域における農地や水の確保の取組についての問題。「地理A」の学習状況からすると難易度の高い設問である。

問5 食料確保にかかわる課題とその解決策についての問題。基本的な設問であるが、具体的な地域や事例をあげるなど、出題の工夫が必要である。

問6 食の安全性についての問題。教科書では必ずしも多く取り上げられてはいないが、時事的な設問で解答は容易である。④の事例だけ時代が古い。また、文章での出題が2問続いており、問い方に工夫が欲しい。

3 分量・程度

(1) 問題の程度

本試験において、平均点が54.70点となり、難易度は昨年度と比べるとやや難化した。その要因として次のようなことが考えられる。

- ① 地図と図表や地図と写真を組み合わせた問題が増えたことで、より正確に地図や図表を読み取る力が問われた。
- ② 「地理A」の学習の中で、取り上げられることが少ない事例や地域の問題が増加した。

(2) 設問数

設問数は近年大きな変化はなく、大問数は5問、小問数は36問であった。60分の試験時間を考慮すると大問、小問数ともに適切であると言える。

4 表現・形式

(1) 形式・配点

小問の出題形式と解答方法は、右の表のとおりである。今年度については、地図を使った出題が増えた反面、文章のみによる出題が大きく減少した。

なお、大問の形式については、地図を用いてテーマを示している大問が2、リード文を用いてテーマを示している大問が1あり、5大問すべてが設問文のみであった昨年度と比べると、出題形式に工夫が見られた。

配点については、第1問だけが2点、その他の大問はすべて3点で統一されていた。問題の

内容構成を踏まえると、第4問で述べたように事項や事例を選択して扱う内容の大問については、配点の改善が望まれる。

		今年度	昨年度
出題形式	地図使用	17	14
	図表使用	9	7
	画像使用	0	1
	地図と図表の使用	2	0
	地図と写真の使用	3	2
	文章のみによる出題	5	12
解答方法	語句・事項の選択	10	12
	文の選択	15	14
	組み合わせて選択	11	10

(2) 表現

第1問の間5の写真スは、キリスト教の教会の特徴が必ずしも明確ではなく、判読するには適切なものとは言えない。また、第2問の間1の地勢図は、地形を読み取るものとして適切とは言えない。この2点を除くと、地図・写真については分かりやすいものであった。

5 要 約

「地理A」は受験者が少ない上に、幅広い層の生徒が受験するため、難易度の調整についてはかなり難しいと考えられるが、今後とも適切な難易度の問題と、基礎的な出題内容、範囲、形式の作問をお願いしたい。

今年度の本試験でも、「地理A」の高等学校学習指導要領で事項や事例を選択して扱うとされている内容からの出題が見られた。センター試験でこのような出題があると、それに対応するため、項目間選択や事例学習の趣旨が生かされなくなる。以上のことから、出題については、特定の学習事項や地域の知識・理解だけを問うのではない出題をお願いしたい。

また、「地理A」・「地理B」の問題は、例年4択が日本史や世界史より少ない。今年度の本試験の問題を見ても、4択の割合が「世界史A」・「世界史B」でそれぞれ94%・97%であるのに対し、「地理A」・「地理B」はそれぞれ72%・68%と明らかに差がある。この差は縮まる傾向にあるが、これから受験科目を選択する高校生の中で、地理を避ける傾向が出てこないか心配である。これからも地理歴史科の出題者間で話し合いを重ね、大きな差にならないような調整をしていただきたい。

今後の出題に際しては、一考をお願いしたい点を次に掲げる。

- ① 「地理A」の履修者にとって、学習の範囲を越えるような細かな知識を問う設問は避けていただきたい。「地理A」の学習状況を踏まえた問題作成をお願いしたい。
- ② 単調な出題形式や単純な図表の読み取りにならないような工夫や、着眼点を導きやすいような説

明文をつける工夫などをお願いしたい。特に、事項や事例を選択して扱う内容に関しては、学習していない生徒でも他の地域や地理的事象から推察して解答できるよう、問い方の工夫をお願いしたい。

③ 「地理A」・「地理B」の共通問題は今年度も大問一つ（第2問）で出題された（小問7問中6問が共通）。昨年度と同様、自然環境に関する設問は「地理A」の受験者にとって難易度が高い設問となっている。単独の問題作成が望ましいが、共通問題とした場合でも、小問については「地理A」にも配慮した内容や問い方にしてほしい。

④ 語句の使用に際しては、第3問問5で述べたように、一般的な名称を使った出題の仕方などにも配慮してほしい。

センター試験が高等学校現場に与える影響は大きく、センター試験が知識偏重から思考力、判断力を求める出題を増やしたことで授業が変わってきている。今後とも、「国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」ことにつながる質の高い出題をお願いしたい。最後に、今年度作問に当たられた諸先生方の御努力に敬意を表したい。

地 理 B

1 前 文

平成 21 年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の受験者は、昨年度と比べると 3,234 人増加したことに併せて、地理歴史科受験者数も昨年度に比べて 2,788 人の増加となった。

本年度の「地理 B」受験者数は 109,651 人（追・再試験 35 人を含む。）で、昨年度よりも 2,108 人の増加となった。「世界史 B」では 191 人、「日本史 B」では 666 人の増加であったことを考えると、「地理 B」の受験者数が他の科目に比べて、わずかであるが増加数が多かった。地理歴史科と公民科の 2 科目受験者数は昨年度より 2,871 人減少したが、そのうち 1,415 人は「地理 B」と公民科の受験者であった。本年度は「日本史 B」と公民科の受験者数 81,742 人に次いで、「地理 B」と公民科の受験者数 72,225 人（全体の 32.6%）となり、昨年度と同様の傾向であった。科目別に見た 2 科目受験の組合せで最も多かったのは、例年と同様に「地理 B」と「現代社会」の 56,620 人であり、「地理 B」を含む 2 科目受験者の 78.4%が 2 科目目に「現代社会」を選択した。ただし、この組合せは公民科における「現代社会」の受験者の減少に伴い、昨年度と比べ 920 人減少した。

本年度の本試験「地理 B」の平均点は 64.45 点であった。昨年度と比べて 1.91 点の下降である。この結果、本年度の「世界史 B」（平均 62.70 点）、「日本史 B」（同 57.94 点）との差はそれぞれ 1.75 点、6.51 点であり、「世界史 B」ではその差は 7.38 点から 1.75 点へと大幅に縮小し、「日本史 B」では 2.09 点から 6.51 点へと拡大した。なお、公民 3 科目の平均点差は最大 11.32 点（「倫理」の 71.51 点と「現代社会」の 60.19 点）であり、昨年度（7.03 点）に比べ 4.29 点拡大した。受験者の層にもよるが、今後とも地理歴史科はもとより公民科の各科目を含めて、平均点の差異による受験者間の有利不利が生じないように、配慮をお願いしたい。

試験問題の検討については、整合性の意味からも昨年度とほぼ同様に次の視点から行った。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標・内容に合致し、教科書や学習活動の実態を踏まえた内容になっているか。
- (2) 地図や図表・統計資料等を分析・考察し、処理する能力を測定する内容になっているか。
- (3) 特定の分野に偏らず、総合的に「地理的な見方や考え方」を問う内容になっているか。
- (4) 問題の分量や程度などに配慮しているか。
- (5) 問題の表現や形式、配点などに配慮しているか。
- (6) 過去の問題に対する意見・評価などを考慮して出題されているか。

2 試験問題の内容・範囲等

本年度の問題は、全般的に高等学校学習指導要領の目的や内容にそった出題であった。出題範囲は自然環境、地域調査、資源・産業、村落と都市、地誌及び現代世界の諸問題の分野から出題され、基本的な知識を問う問題を中心に、地図や写真、統計資料の読み取りなど「地理的な見方や考え方」を問う設問も適宜組み込まれていた。

出題分野は次のとおりである。昨年度同様に地域調査や地誌的な内容が出題され、大問数も 6 問と増減はなかった。昨年度に比べて、大問の配列が変更され、「地域調査」が第 2 問となった。また、小問

の解答数が1問増えて、37問となった。なお、「地理A」との共通問題は第2問「地域調査」の小問6題のみと昨年度同様であった。

(1) 出題分野

- 第1問 ヨーロッパとその周辺地域の自然環境
- 第2問 境港市周辺の地域調査
- 第3問 農林水産資源とそれを利用した産業
- 第4問 村落、都市
- 第5問 カナダの地誌
- 第6問 現代世界の諸問題

(2) 内 容

第1問 ヨーロッパとその周辺地域の自然環境に関する大問である。昨年度と異なりヨーロッパ周辺という特定の地域を取り上げた。全体的には地形や気候についての基本的な知識によって解答できる標準レベルの設問が多いが、細かな知識が問われる設問も見られた。

問1 4地点における月平均気温と月降水量に関する選択問題である。ヨーロッパ周辺の気候分布についての基本的な知識があれば容易に解答できる。

問2 大陸棚の分布とプレートの境界の位置に関する選択問題である。ノルウェー沖の大陸棚の分布について、教科書で取り扱われることは少なく戸惑ったであろう。

問3 地図上の4本の線に沿った地形の断面図に関する選択問題である。ヨーロッパ周辺の山脈の位置や地体構造についてやや細かな知識が必要であり多少戸惑ったであろう。なお、地図を見る力が必要とされる良問である。

問4 3地点における自然災害に関する組合せ問題である。三つの地域周辺における火山の分布や地震の発生についての知識があれば容易に解答できる。

問5 局地風の名称と特徴に関する組合せ問題であり、三つの空欄を八つの組合せから選択させる形式である。局地風について、名称だけでなく、その特色とメカニズムまで理解していないと正答できない良問である。

問6 ヨーロッパに分布する原生林の特色に関する文の正誤問題である。世界の気候と植生の分布について理解していれば容易に解答できる。

問7 フィンランド周辺に分布する湖の成因及び特色に関する文の正誤問題である。付近に氷河地形が分布していることを理解していれば容易に解答できる。

問8 ケスタ地形の分布や特色に関する文の正誤問題である。模式図だけを見て②の「階段状の台地」と判断した受験者がいたであろう。また、③の「非対称な断面」はやや難しい表現であったため戸惑った受験者もいたであろう。

第2問 境港市周辺の地域調査に関する大問である。昨年度と同様に「地理A」との共通問題として出題された。地勢図、地形図、写真、グラフなど多様な資料を用い、それらを複合的に分析し、判断する力・活用する技能が試された。グラフを読み取る設問が複数あり、受験者は解答に時間を要したであろう。難易度は昨年度とほぼ同様であった。

問1 地勢図から読み取ることのできる地形の様子に関する正誤問題である。受験者が地勢図からの読み取りに不慣れであること、大根島が一見して陸繋島りくけいとうに見えること、飯梨川の三角州が典型

的な形態でないことなどの理由で受験者は戸惑ったであろう。

問2 写真が撮影された方向を判断させる選択問題である。弓ヶ浜半島の形状、江島との位置関係を手掛かりに判断すれば容易に解答できる。なお、写真が不鮮明であったことについては改善をお願いしたい。

問3 境港市の土地利用に関する文の正誤問題である。複数の資料を複合させて判断する力を必要とするが、地図記号などの地形図に関する基本的な知識があれば容易に解答できる。

問4 境港市の産業の推移を示した二つのグラフに関する文の正誤問題である。解答に時間を要するが、選択肢を正しく読み、落ち着いて考えることができれば容易に解答できる。ただし、④の「同じ傾向」についてはあいまいな表現であるため、判定に迷うことも考えられる。また、選択肢の内容に難易差が大きいことについても改善をお願いしたい。

問5 境漁港の魚介類の水揚量の推移と境港市の製造業の事業所数とその出荷額の推移の三つのグラフの読み取りに関する文の正誤問題である。問4と同様に解答に時間を要するが、選択肢の文を正確に読み取ることができれば容易に解答できる。

問6 地域調査の方法に関する文の正誤問題である。調査の目的を正確に読み取った上、各選択肢との整合性を判断することができれば容易に解答できる。

第3問 世界の農林水産資源とそれを利用した産業に関する大問である。農林水産資源や第1次産業について、幅広い範囲から出題されている。全体的に標準的な出題傾向にあり、受験者にとってはなじみのある取り組みやすい設問が多かった。

問1 世界で広く栽培されている作物の主な栽培起源地に関する選択問題である。主な農作物の栽培起源地についての基本的な知識があれば容易に解答できる。

問2 小麦の収穫期、春小麦及び冬小麦の播種期はしゅきに関する選択問題である。インドの小麦栽培の学習において、収穫期や播種期を上げることが少ないので受験者は戸惑ったであろう。

問3 アルゼンチン、インド、オーストラリア、スイスの畜産業の特徴に関する選択問題である。畜産業の地域的特色を理解していれば容易に解答できる。

問4 木材の伐採量、輸出量、輸入量に関する組合せ問題である。木材の生産及び需給についての基本的な知識があれば容易に解答できる。

問5 中国、ノルウェー、ペルーの水産業の特徴に関する組合せ問題である。中国で内水面漁業、ペルーでアンチョビー漁が盛んであることを理解していれば容易に解答できる。

問6 農業のグローバル化とその関連事項に関する文の正誤問題である。米が自給的傾向の強い作物であることを理解していれば容易に解答できる。

第4問 村落、都市に関する大問である。様々な図表を用いながら、村落と都市について立地や形態、機能、都市問題、都市景観など、幅広くかつ総合的に扱った問題である。細かな知識を必要とする設問やなじみのない図に関する設問があり、受験者にとっては取り組みづらく、やや難しい問題であった。

問1 村落の形態に関する文の正誤問題である。村落の形態と機能について細かな知識が必要であったため受験者は戸惑ったであろう。

問2 キャンベラ、チュニス、ニューヨークにおける街路の形態的特徴に関する組合せ問題である。都市に関する学習で街路形態を重要事項として取り扱うことは少なく、また、チュニスがなじみ

のある都市ではないため受験者は多少戸惑ったであろう。

問3 シドニー、デリー、ハーロー、ボローニャの都市整備や地域開発の特徴に関する選択問題である。ハーロー、ボローニャはなじみの薄い都市であり、細かな知識が必要とされる問題であった。

問4 ロサンゼルスにおける人種・民族ごとの居住地に関する選択問題である。図には居住区以外にCBDの位置の情報しかないため受験者は戸惑ったであろう。また、「戸建て住宅地区」、「家賃や通勤などの経済的負担の少ない地区」は、迷いを生じさせる表現であると思われる。

問5 都市の立地や機能に関する組合せ問題である。仙台市が地方中枢都市、千葉市が東京に隣接する都市、浜松市が工業都市という知識があれば解答できるが、都市の特徴を正確にとらえる力が必要とされる。

問6 商業地の都市景観に関する文の正誤問題である。ターミナル周辺、地方中小都市、郊外の幹線道路沿い、城下町や宿場町における商業地の景観の特色が理解できていれば容易に解答できる。

第5問 カナダの地誌に関する大問である。近年、州あるいは大陸規模の地誌が出題されることが多く、一国の地誌が出題されるのは久しぶりである。地誌的な学習の対象としてはなじみの薄いカナダについての出題であったことや細かな知識が必要とされる設問が見られるため、例年の地誌の問題よりもやや難易度が高く、受験者にとってはやや難しい問題である。

問1 カナダの自然環境に関する文の正誤問題である。太平洋岸の西岸海洋性気候地域の存在など細かな知識が必要であり受験者は戸惑ったであろう。

問2 カナダの農牧業に関する選択問題である。北アメリカの農牧業についての知識があり、さらにFがアメリカ合衆国の春小麦地帯の延長上に分布していることに着目できれば容易に解答できる。

問3 バンクーバー（ヴァンクーヴァー）、エドモントン、トロント、モントリオールの産業に関する選択問題である。カナダの都市に関する細かな知識を必要とし、教科書レベルを超えた難問である。

問4 カナダへの移民の出身地域・国別割合の推移に関する組合せ問題である。カナダにおけるアジア系の移民について、教科書で扱われることはない。むしろ北アメリカへの移民に関してはヒスパニックの印象が強いため誤解した受験者がいたのではないかと。

問5 三つの州あるいは準州における母語別人口の割合に関する組合せ問題である。カナダの歴史、先住民、ケベック州独立運動等に関する知識を持っていれば容易に解答できる。

問6 アメリカ合衆国、カナダ、メキシコの輸出入額とその第1位と第2位の品目に関する組合せ問題である。3か国相互の経済関係を総合的に思考・判断し、図の中に当てはめねばならず「地理的な考え方」を必要とする良問である。

第6問 現代世界の諸問題に関する大問である。水資源、人口・食料問題、女性の社会進出など、今日的な課題について幅広く取り扱った問題である。幅広い知識が必要とされるが、基本的な事項を素直に問う設問が多く、全体的には標準レベルの問題である。

問1 1人当たりの水資源利用可能量に関する正誤問題である。降水量と蒸発量の分布、降水のメカニズムについて基本的な知識があれば容易に解答できる。水資源に関する設問であるにもかかわらず、人口密度に関する単純な知識で正答できてしまう。出題の意図が反映される発問方法に

についての工夫が必要である。

問2 アルゼンチン、ケニア、フィリピンにおける人口問題に関する組合せ問題である。経済の発展とともに医療の普及が進行することを理解していれば容易に解答できる。

問3 三つの国の食料需給とその背景に関する組合せ問題である。政治的混乱、多収量品種、地下資源で得た外貨など、それぞれの国を想起させるキーワードに注目できれば容易に解答できる。

問4 シンガポール、タイ、ドイツ、フランスにおける出生率と65歳以上人口の割合に関する選択問題である。先進国における少子高齢化社会の進行や発展途上国における人口急増など、人口問題に関する基本的知識があれば容易に解答できる。

問5 カンボジア、パキスタン、メキシコにおける女性の社会進出に関する組合せ問題である。多くのイスラム社会で女性の社会進出が遅れているという知識を持たない受験者にとってはカンボジアとパキスタンの判別が困難である。宗教や産業構造、経済発展の度合いなど各国の特徴を総合的に把握する力が求められる良問である。

3 要 約

(1) 問題の程度

本年度は、基礎・基本的な教科書レベルの問題から、地理的知識や考察力・思考力を必要とする問題まで、幅広く出題されている。図表を分析・考察して処理する能力を問う問題や、正確な深い知識を必要とする問題も多く出題されている。特に小問には都市名など細かな知識を必要とする難問もあり、問題による難易の差が大きくなっている。大問の配列が変わり、第2問の「地域調査」で図表の読み取りに時間を要したことや、「地誌」がカナダ1国に限られ、細かな知識を必要とする小問も見られたこともあり、全体を通してみると、昨年度よりやや難化傾向にあった。

今後の高等学校の授業においては基本的な地理的知識の習得を行いながら、「地理的な見方や考え方」及び「地理的技能」を身に付けることが求められる。

(2) 設問数・配点・形式等

設問数は大問数6問で、第1問は八つの小問、第2問から第5問は六つの小問、第6問のみ五つの小問で構成されており、全解答数は昨年度より一つ増えて37問であった。

配点は、第1問は3点が二つと2点が六つの18点満点、第2問はすべて3点で18点満点、第3問、第4問、第5問は3点五つと2点一つの各17点満点、第6問は3点三つと2点二つの13点満点であった。

設問形式は、昨年度の4択（25問）と6択（11問）の問題数は同じで、8択が1問付け加えられた。組合せ問題は、6択が11問と8択が1問であった。地図や統計資料、写真を用いて判断する問題は、37問中33問と多数出題された。写真を用いた問題は昨年度の出題はなかったが、本年度は2問出題された。

以上のことから、多角的に地理的知識や地理的思考力を問う出題意図が読み取れる。組合せ問題は8択が1問増えたが、ほぼ昨年度同様の出題であり、判定しやすい問題であった。しかし、正誤問題や選択問題に細かな知識を必要とする問題が見られ、また図表を扱った問題が増えた分、的確な判断に時間を要したであろう。

(3) おわりに

例年この高等学校教科担当教員の意見が問題作成によく反映されていることは大変有り難く、今後とも御配慮をお願いしたい。本年度の本試験は、問題検討の6視点から見て、いずれの項目に関しても目標を達成し得たと判断できる。特に本年度は、基本的知識に基づいて解答する設問が多く、全体的には標準的な問題であった。しかし、一部の小問には細かな地理的知識や読み取りに時間を要する問題も見られた。センター試験が高等学校における地理学習の成果を測る物差しである以上、教科書のレベルを超えた難問や図表の読み取りだけで地理的な知識を必要としない設問は改善の必要がある。

「地理B」の学習は「地理的な見方や考え方」及び「地理的技能」の習得を目指しており、その力を問う出題でなければならない。このような考え方に立って、様々に創意工夫を凝らして考察力・分析力を問う作問により、受験者の地道な努力が報われるような出題を今後ともお願いしたい。また、図表等は細部にわたり、明確に判断できるように掲載することをこれからもお願いしたい。なお、解答には直接影響がなかったとは言え、昨年度に引き続き、問題訂正があった。今後は厳正な出題をお願いしたい。